

高齢社会における農的活動の意味に関する研究 —東日本大震災で被災した農村地域の高齢者を対象として—

望 月 美 希

（東京大学大学院新領域創成科学研究科・日本学術振興会特別研究員DC）

目 次

1. 調査研究の背景と目的
2. 調査方法の設計
3. 調査の結果
 - 1) 亘理町概要
 - 2) 健康農業活動の経緯と活動内容
 - 3) 参加者の概観
 - 4) 参加者のライフストーリー
 - （1）AGさんのケース
 - （2）AIさんのケース
 - （3）Eさんのケース
4. 考察—健康農業活動に何を求めるのか
5. 結論と今後の検討課題
6. 論文作成計画と調査研究結果の活用方針

1. 調査研究の背景と目的

2011年に発生した東日本大震災により大きな被害を受けた東北地方では、「創造的復興」のスローガンのもと、農業の復興に向けて、技術面（農地の大区画化、植物工場等の新たな技術の導入）および経営面（農業法人化の奨励）の改革による「強い農業」の構築が進んでいる。東北地方は日本の食糧供給基地として大きな役割を果たしてきたが、震災前から農業人口の減少や高齢化といった課題を抱えており、農林漁業の再生が必要とされていた。この政策課題を受けて、被災地域の農業構造には変化が見られた。宮城県を例に挙げると、震災

前の農業構造について、世帯当たりの耕地面積は全国平均からすれば比較的広いものの、第二種兼業農家が多いという特徴が見られていた（冬木 2011）。しかし、震災後の2015年農林業センサスの集計結果では¹⁾、被災した沿岸部を中心に組織経営体が増加し、家族経営体の数は大幅に減少した。こうした統計的結果を裏付けるように、宮城県内の事例地の調査では、被災と復興政策の方向性を理由とした農業引退者の存在が明らかとなった（望月 2016）。

一方、個々の被災者に目を向けると、畑や仕事を失った高齢者から「することがない」という日常生活に対する不満の聲がしばしば聞かれている（三井 2013）。この「することがない」という状況は、外に出る機会や日常生活の充足感の欠如の聲と捉えられているが、こうした状況が悪化すると生活不活発病（大川 2013）や孤独死（額田 2013）といった生に関わる問題に結びつくことが懸念されている。以上のことから、生活変化の影響が懸念される高齢者層に焦点をあて、日常生活における農業の意味付けを再考し、地域における農業の在り方を検討する必要があると考えられる。

震災復興という文脈を除けば、近年、「高齢者にとっての農業」の位置づけとして、福祉と農業の連携の可能性が論じられており、政策側も両者の連携推進を試みている（松本・高塚 2013）。池上甲一は、そうした福祉の場面での農業の意味について、「農的な営為には、『良くあること』としての福祉²⁾を引き出す力が備わっている」（池上 2013: 34）とし、農的な営為が持つ保養力・健康増進力・治療力（癒しの機能）を「農的福祉力」³⁾（池上 2013）とし、高齢者、障がい者福祉の場面で活用される可能性に期待を寄せている。しかし、池上の鳥取県内の農村のケアハウスの事例では、福祉的要素をねらいとした農的活動は徐々に低調となり、その理由として入居者が園芸活動に魅力を感じなくなっているという実態が明らかとされている。そのため高齢者の視点から農業が持つ意味は、実証的なレベルにおいて十分明らかではない。

こうした点を踏まえ、本研究では、東北地方の被災高齢者の復興過程において、農作業に従事すること（本稿では、農的活動⁴⁾とする）の意味を考察することを目的とする。具体的には、高齢者に関する震災前後の生活における農業の位置付けと意味を明らかにし、被災地の農村高齢者の現状を考察する。

本研究が対象とする宮城県亘理郡亘理町では、NPO法人ロシナンテス（以下、

ロシナンテス)により「健康農業亙理いちご畑」(以下、健康農業)という共同で農作業を行う活動が行われている。亙理町は、仙南地域に位置する農村地帯であり、稲作やいちご栽培が盛んな地域であった。震災後は他の沿岸部地域と同様に、農業構造の変化の兆しが見られている。

2. 調査方法の設計

本研究は、質的調査法に基づくものである。具体的には、被災者の生活変化のリアリティと主観的な意味世界を描き出すために、ライフストーリー研究を参考とし、対象者へのヒアリングを実施した。ただし、活動の様子や参加者の全体像を把握するため、参与観察と質問紙調査も同時に行った⁵⁾。参与観察については、筆者は2013年6月より健康農業にボランティアとして参加している。調査実施期間は、2013年5月から現在まで継続しているが、今回用いた活動参加者に関するデータ収集は、2015年8月31日から9月14日の間に行った。この間、参加者1人当たり30分から1時間のヒアリングを実施した。本研究の対象者は、健康農業を運営するスタッフと健康農業の全参加者(2015年9月時点)計37名(うち調査協力者36名)である。倫理的配慮として、対象者全員に調査について説明を行い、協力可否の同意を取った。調査内容に関して、参与観察とスタッフへのヒアリングから、地域社会の状況や健康農業の変遷と現況を把握した。活動参加者へのヒアリングからは、生い立ちから震災、現在までの生活、特に農業との関わり方の変遷、現在の生活や活動の位置付け等、震災前後の変化やそれに対する心境を明らかにした。

本調査が参考としたライフストーリー研究⁶⁾とは、桜井厚の定義によれば、「個人のライフ(人生、生涯、生活、生き方)についての口述(オーラル)の物語である。また、個人のライフに焦点を合わせてその人自身の経験をもとにした語りから、自己の生活世界そして社会や文化の諸相や変動を全体的(ホリスティック)に読み解こうとする質的調査法の一つのこと」(桜井 2012: 6)である。本研究が、様々な質的調査法の中でもライフストーリー研究に依拠した理由として以下の二点がある。

一点目として、復興過程における農的活動の意味を考察するには、震災後の

状況のみではなく、震災前の生活や農業の位置づけに着目しなければならないためである。つまり、対象者の人生に関する語りを得ることで、過去から現在にかけての対象者と農業の関係の変遷が明らかになるためである。

二点目として、被災経験とその後の生活変化の状況は、同地域内（自治体、さらには集落）であっても、個人単位にしてみれば大きな差があり固有性が強い⁷⁾ためである。そのため、被災経験や避難生活の経験に関する語りを一般化して捉えようとするよりも、さまざまなケースに着目し、その主観的な意味世界を掘り下げていくことで、農的活動についての新たな知見を得られる可能性がある⁷⁾。

3. 調査の結果

1) 亘理町概要

震災により被害を受けた亘理町は、4つの字（旧村）からなる地域である。津波被害を受けたのは、この4つの字のうち沿岸部に位置するA地域とB地域である。震災前のA地域は、漁港があったため漁業者や水産加工業者も多く、畑や田んぼを所有する半農半漁といった世帯が多かった。ただし亘理町の名産品のいちごを作る農家は少なく、野菜が中心であった。一方、B地域ではA地域に比べると専業農家が多く、とりわけいちご栽培を行う農家が多く見られるなど、地理的には隣り合う地域でありながら生業構造は異なっていた⁸⁾。震災後の避難生活について、9地区の仮設住宅が造成され、2011年4月末より順次入居が始まった。そのうち大きなまとまりは公共ゾーン（計558戸）、中央工業団地（計272戸）であり、これらの地区に町内の7割強の仮設住宅がある。農業の復興に関しては、東北一のいちごの産地であった亘理町独自の方針として、「いちごを復興のシンボル」に位置づけていくことを示しており⁹⁾、町をあげたいちご団地（高設人工土壌型の植物工場）の建設に取り組み、2013年に、いちごの出荷を再開した。

2) 健康農業活動の経緯と活動内容¹⁰⁾

健康農業活動を実施するロシナンテスは、スーダンへの医療支援を目的に

2006年に設立されたNPO法人である。東日本大震災発災の直後、2011年3月から被災地支援に携わり、住宅復興作業の援助と医療支援の活動を開始した。これらの活動へのニーズが落ち着き、被災者の日常生活支援が必要とされる段階に移ると、子どもへの教育支援活動を始めた。2012年に事務所を名取市から亙理町に移転した際に、「地域支え合い体制作り事業」の一環である「園芸療法¹¹⁾事業」の委託を受ける。亙理町では、仮設住宅入居者の健康調査によって、生活不活発病の兆しが多くの人にあることが明らかとなり、民間企業・大学と共に「園芸療法事業」が構想されていた。その際、事業を実施する主体としてロシナンテスに声がかかった。

しかし、東北事業部部長のOさん（40代男性）は、事業を始めるにあたって園芸療法について学んだが、被災者に関わる中で、「自分たちが活動している地域の高齢者は、膝が痛い、内臓に若干疾患がある、糖尿病の気があるとかあるけれども、病人ではない。でも、療法というのは、病人に対して施すものよね。それで、これ（既存の園芸療法）は違うぞ」と感じたという。そこで、「もう思い切って普通に農業やった方がよかろう」と考え、行政に対し、活動を行うための農地を求めた。その結果、事務所として借りた家屋を取り囲む畑、行政が管理するハウス1棟を確保し、さらに近隣住民からも畑を借りることができた。参加者の募集は、スタッフが仮設住宅を一軒ずつ訪問したり、仮設住宅集会所で説明会を開催した。参加者自身が友人や親類を活動に誘い参加に至るというケースもある。

健康農業の活動は、月曜日から金曜日まで曜日ごとに、5～8人程のグループに分かれて行う。朝、スタッフが仮設住宅の集合場所や転居先の住宅に車で迎えに行き、参加者が畑に揃うとラジオ体操を行う。その後、作業を開始し、途中休憩をとりながら、正午に作業を終えて昼食を皆でとり、スタッフが参加者を仮設住宅に送り届ける。活動内容は、苗づくりから収穫までさまざまであり、作物は野菜やいちごなど多品目を生産している。収穫物は昼食や参加者、ボランティアの持ち帰りにあてられる。農業指導に関して、スタッフは農業に関して未経験であったため、農業経験者である参加者が主体となって進められている。

3) 参加者の概観（表 1、2）

参加者全36名の性別は、男性 5 名、女性31名、平均年齢は78.8歳（最低年齢62歳、最高年齢88歳）である。80代以上の割合が、52.8%と半数以上を占めている。震災前後の住環境の変化に着目すると、震災前は全員が「一戸建て持ち家」に住んでいたが、住宅被害を受け仮設住宅の生活を経験する。参加者はA地域とB地域に居住していたが、仮設住宅の暮らしの後は、元の居住地に家を再建した者、集団移転地へ転居した者、その他互理町内に転居した者と様々であった。

農業との関わりについて、震災前は、農作物の販売を行っていた（兼業農家、専業農家）と回答した者が47.2%、自家消費用の家庭菜園を行っていた者が33.3%であり、参加者の約 8 割は、農作業の経験がある。震災後も自宅の跡地や新たな自宅の庭等を利用して家庭菜園を営む者が全体の約半数いる。

震災前の生計手段については、年齢層が高いにもかかわらず、就業率が高い（66.7%）という点に着目すべきである。その内容は、自営農業が多くを占めてるが、雇用による就労では、シルバー人材センター、警備員、洋裁などの内職、地元の商店でのパートがあげられた。参加者は65歳以上の高齢者ではある

表 1、2 参加者の概観（2015年9月の質問紙調査より筆者作成）

	項目	人数 (%)
性別	男	5 (13.9)
	女	31 (86.1)
年齢	60代	6 (16.7)
	70代	11 (30.6)
	80代	19 (52.8)
配偶者	いる	8 (22.2)
	死別した	28 (77.8)
状態同居	独居	10 (27.8)
	家族と同居	26 (72.2)
震災後のすまい	一戸建て持家	23 (63.9)
	一戸建て借家	1 (2.8)
	仮設住宅	2 (5.6)
	復興公営住宅	7 (19.4)
	マンションアパート	1 (2.8)
	互理町公営住宅	2 (5.6)
被害状況	全壊	31 (86.1)
	半壊	2 (5.6)
	床上浸水	1 (2.8)
	床下浸水	1 (2.8)
	無回答	1 (2.8)

	項目	人数 (%)
出身地	互理町	20 (55.6)
	隣接市町村	8 (22.2)
	宮城県内	4 (11.1)
	その他	3 (8.4)
学歴	無回答	1 (2.8)
	学校に入っていない	1 (2.8)
	中学校	21 (58.3)
	高等学校	13 (36.1)
農業と震災の関わり	短期大学・専門学校	1 (2.8)
	専業農家	7 (19.4)
	兼業農家	10 (27.8)
	家庭菜園	12 (33.3)
の震災仕事前	その他	1 (2.8)
	関わりはない	6 (16.7)
	雇用	9 (25.0)
	自営業	15 (41.7)
震災後の機会を	無職	9 (25.0)
	無回答	3 (8.3)
	家庭菜園	13 (36.1)
	市民農園・共同農園	1 (3.1)
家族の手伝い	やる機会はない	2 (6.3)
	やる機会はない	16 (50.0)
	無回答	4 (11.1)

表3 現在の生計手段（2015年9月の質問紙調査より筆者作成、複数回答）

内容	人数	（全参加者中）
雇用労働	2	5.6 %
家族の収入	15	41.7
年金	36	100.0
自分の貯金	8	22.2
その他	2	5.6

が、震災がなければ普通に働き続けていたであろう人々であると言える。震災後の状況（表3）を見ると、仕事を続けている人は全参加者中2人となる。理由として、販売農業の引退や雇用元の被災による解雇があげられており、年金受給も見込めたことから、再就職や自営業の再開はあきらめている。ただし年金の少なさを心配する語りはあるものの、極度の生活不安（住宅が確保できない、食事をとるとができない等）を聞くことはなく、生計手段をある程度確保していると考えられる。

4）参加者のライフストーリー

震災後に自らの畑を再開している者も半数見られるなかで、参加者はどのような動機から、活動に参加しているのだろうか。以下では、元農業者で震災により販売は辞したが、震災後も自家用畑を続けながら健康農業にも参加する者（AGさん）、元農業者で震災後は健康農業のみに参加する者（AIさん）、震災前は農業や地域に馴染みが薄かった者（Eさん）の3人のライフストーリーに着目する（表4）。

（1）AGさんのケース

まず、震災前までいちご農家であったAGさん（75歳女性）のケースを見ていく。AGさんはB地域の農家に生まれ、23歳でB地域内の夫と結婚し、農業を続けてきた。実家では、米といちご、野菜を作っていた。震災直前は、いちご1反歩、田んぼ1町歩程度であった。夫が亡くなってから、長男と二人暮らしであったが、長男は勤めに出ていたためAGさんが中心となって農業を営んでいた。トラクターを始めとした大型機械も揃えており、稲の収穫のみ近所の人に委託して、それ以外は、長男と2人で作業していた。米といちごは農協に出荷をし、長男の収入と合わせて、生計手段となっていた。

表4 インタビュー実施者のプロフィール（2015年9月調査より筆者作成、*は無回答）

	性別	年齢	最終学歴	出身地	震災後のすまい	震災前すまい	被害状況	配偶者	同居家族	震災前の仕事	震災後農業をやる機会	震災前農業をやる機会
A	女	67	短期大学・専門学校	宮城県内	復興公営住宅	一戸建て持家	全壊	死別	×	自営業・家族経営	なし	家庭菜園
B	男	70	中学校	亶理町	復興公営住宅	一戸建て持家	全壊	いる	○	雇用	家庭菜園	家庭菜園
C	女	85	中学校	亶理町	一戸建て持家	一戸建て持家	全壊	死別	○	雇用	なし	その他
D	女	81	中学校	宮城県内	亶理町公営住宅	一戸建て持家	全壊	死別	×	なし	なし	*
E	女	69	中学校	その他	一戸建て持家	一戸建て持家	全壊	いる	○	雇用	なし	家庭菜園
F	男	69	高等学校	亶理町	一戸建て持家	一戸建て持家	全壊	いる	○	雇用	家庭菜園	家庭菜園
G	男	62	高等学校	亶理町	一戸建て持家	一戸建て持家	全壊	いる	○	雇用	家庭菜園	兼業農家
H	女	83	中学校	隣接市町村	一戸建て持家	一戸建て持家	全壊	死別	○	なし	なし	家庭菜園
I	女	80	中学校	隣接市町村	一戸建て持家	一戸建て持家	全壊	死別	○	*	*	*
J	女	88	高等学校	亶理町	復興公営住宅	一戸建て持家	全壊	死別	×	なし	なし	家庭菜園
K	女	83	中学校	亶理町	一戸建て持家	一戸建て持家	全壊	死別	○	なし	なし	*
L	女	81	高等学校	隣接市町村	復興公営住宅	一戸建て持家	全壊	死別	○	自営業・家族経営	なし	兼業農家
M	女	83	高等学校	隣接市町村	一戸建て持家	一戸建て持家	全壊	死別	○	*	*	*
N	女	83	高等学校	亶理町	一戸建て持家	一戸建て持家	全壊	いる	○	自営業・家族経営	なし	専業農家
O	女	78	中学校	亶理町	亶理町公営住宅	一戸建て持家	全壊	死別	×	自営業・家族経営	なし	専業農家
P	女	79	中学校	亶理町	復興公営住宅	一戸建て持家	全壊	死別	×	自営業・家族経営	市民農園	兼業農家
Q	男	68	高等学校	亶理町	一戸建て持家	一戸建て持家	全壊	死別	×	雇用	家庭菜園	兼業農家
R	女	85	学校に行かなかった	亶理町	一戸建て持家	一戸建て持家	半壊	死別	○	自営業・家族経営	家庭菜園	兼業農家
S	女	81	高等学校	隣接市町村	一戸建て借家	一戸建て持家	*	死別	×	自営業・家族経営	家庭菜園	兼業農家
T	女	76	中学校	宮城県内	復興公営住宅	一戸建て持家	床上浸水	死別	×	雇用	家庭菜園	家庭菜園
U	女	86	中学校	亶理町	一戸建て持家	一戸建て持家	全壊	死別	○	自営業・家族経営	なし	専業農家
V	女	76	高等学校	亶理町	復興公営住宅	一戸建て持家	全壊	死別	×	なし	なし	家庭菜園
W	女	79	中学校	その他亶理町	一戸建て持家	一戸建て持家	全壊	いる	○	自営業・家族経営	家庭菜園	専業農家
X	女	85	中学校	亶理町	一戸建て持家	一戸建て持家	全壊	死別	○	なし	家庭菜園	家庭菜園
Y	女	80	中学校	亶理町	一戸建て持家	一戸建て持家	全壊	死別	○	自営業・家族経営	なし	*
Z	女	86	中学校	亶理町	仮設住宅	一戸建て持家	全壊	死別	○	自営業・家族経営	なし	専業農家
AA	女	76	高等学校	隣接市町村	一戸建て持家	一戸建て持家	全壊	死別	×	なし	家庭菜園	家庭菜園
AB	男	88	中学校	宮城県内	マンション・アパート	一戸建て持家	全壊	いる	○	雇用	*	*
AC	女	79	中学校	亶理町	一戸建て持家	一戸建て持家	全壊	死別	○	*	*	家庭菜園
AD	女	84	高等学校	亶理町	一戸建て持家	一戸建て持家	床上浸水	死別	○	自営業・家族経営	なし	兼業農家
AE	女	87	中学校	一戸建て持家	一戸建て持家	半壊	死別	○	なし	家庭菜園	家庭菜園	
AF	女	79	高等学校	隣接市町村	仮設住宅	一戸建て持家	全壊	死別	○	自営業・家族経営	なし	専業農家
AG	女	75	中学校	亶理町	一戸建て持家	一戸建て持家	全壊	死別	○	自営業・家族経営	家庭菜園	兼業農家
AH	女	83	中学校	亶理町	一戸建て持家	一戸建て持家	全壊	死別	○	自営業・家族経営	家族の手伝い	兼業農家
AI	女	78	中学校	隣接市町村	一戸建て持家	一戸建て持家	全壊	死別	○	なし	なし	専業農家
AJ	女	66	高等学校	その他	一戸建て持家	一戸建て持家	全壊	いる	○	自営業・家族経営	家庭菜園	*

震災後は、集団移転地に入りいちご栽培を辞めてしまったが、実家の近くの土地と前の家の横に80a程の畑を作り、週に2回通って自家用野菜を育てている。震災前は、「昔はほとんど皆さんにあげるくらいいっぱい作ってたから。買ったことはない、野菜はね」といい、震災後も「皆さんにあげるくらい作ってるから食べ切れない。あげるだけだね、皆さんは（畑）ないから」と誰かにあげることを前提として、自家消費分よりも多く作物を栽培している。他の参加者とは、「結っていうのね。結構交流はあったの」と元の地域の共同の農作業を通じた顔なじみであったという。

筆者：今日の曜日グループはもともと知り合い？

AG：みんな友達だね。3人違うけどあとのB地区はみんな一緒。集落も一緒。

筆者：集落も一緒に。

AG：友達っていうか、あえていうなら仲間だね。AFさんは友達だよ、元から。AIさんはうちの前の人だし。AHさんは、ちょっと前のほうだけど、AHさんは年も離れて、同じ集落でも、南と北と別れてるから、あんまり。ここに来て分かった人。どっちにしても、津波後は皆さん仲いいと思うよ。

筆者：やっぱり仮設で？

AG：仮設で長く、3年半も一緒にいたから。今言ったとおり、顔を知ってるから、私はすぐに、餅を作れば餅を持っていったり、赤飯作れば、「はい」って。AHさんにやってたかな。今もお野菜あれば持っていったり。だからって、私は私で好きでやってるということ。だからね、友達って言えるか分かんないけど、仲間だね。

AGさんは健康農業の他のメンバーを「友達っていうか、あえていうなら仲間」といい、おすそ分けや共に農作業をする繋がりであると捉えている。元の繋がりに加えて、震災後は、仮設住宅や健康農業で出会った同じ地域であった人とも強い繋がりになった。自身の畑があるにも関わらず、健康農業に参加する理由として、以下のように述べている。

筆者：他にも畑をご自身でもやっているようですが、それでもいちご畑に来るのは、みんなに会えるとか？

AG：それはあるね。やっぱり1週間用事で来ないと寂しいよね。何だい、ずるで休んだわけではなく用あって休んだんだけど、悪いなと思うよ。反面、寂しい割合もあるけど、やっぱり「悪いね」と思う。

筆者：みんな来てて？

AG：うん、みんな働いてんのにと思って。

「寂しい割合もあるけど『悪いね』と思う」と語るように、AGさんは健康農業をレクリエーションという意味以上に、共同で「働く」場であると捉えている。

(2) AIさんのケース

次に専業農家で現在は農業を辞めたAIさん（78歳女性）のケースを見ていく。AIさんは亙理町近隣の市町村の農家出身で、中学校卒業後は、実家の農業（米、いちご）を手伝い、結婚と同時に亙理町B地域へ移った。結婚後は夫と共に水産業（海苔生産）と農業（米、いちご）を営んだ。夫と二人暮らしで、8年前に夫が亡くなってからは一人で暮らしていた。所有していた田んぼは近隣に委託したが、1人になってからも震災前は1反歩程の畑を耕作し、自給用の野菜を作っていた。震災によって家は全壊の被害を受け、仮設住宅に移る。機械や道具が流されてしまったため、震災後は畑をやめてしまい、食材は「買いつくし」になったという。その後、息子夫婦、孫夫婦と同居することになり、現在は亙理町内の内陸側に住んでいる。こうした震災前後の暮らしの変化について、以下のように語っている。

AI : 今は神経使って、10キロ痩せたって（笑）。若い人と今まではいなかったから。自由なんですね、仮設にいてもね。一人娘、たまに泊まりには来るんですけど、一人暮らしだから自由なもんで。

筆者：そうなんですね。

AI : 神経使ってちょっと痩せるんだね。ふふふ。

筆者：あれですかね、いろいろ遠慮があって。

AI : うん。今もやっぱり、ご飯食べてても、若い人のところにいたら邪魔になるな。若い人のところに30分ぐらいしかいないんだって、笑ったの。で、部屋さ行ってテレビ見てるんですよ。

筆者：そうなんですね。おうちにいても部屋で1人でいることが多い？

AI : 日中は暇なとき、塗り絵したり週刊誌見たりね。やっぱり部屋で過ごすのが多いですね。楽しみは、こういういちご畑（健康農業のこと）。やっぱり1週間に一度、楽しみなんです。みんなさ会える。

11年間1人で暮らしてきたAIさんにとって、「自由、一人の時間が長かったから」と家族との同居は気を遣う場面もある。そのため、健康農業の他に週二回のデイサービスや支援活動の体操教室に通って、外に出る機会も積極的に作ろうと

している。健康農業は友人であるAFさんに誘われて参加することになった。健康農業の活動について、「やっぱり思い出すもんですから、茶碗洗いだのなんだの楽しみです、みんなして洗って。やっぱり楽しみです、みんなであうっていうのはね」と、食事の準備も家族が行い部屋に1人であることが多いという震災後の日常生活と対比的に見ている。

筆者：震災起きる前は、畑やったりとか。

AI：はい。畑やったりしてたんですけどね。それから仮設に入ってからは何にもしないんで。

筆者：いちご畑へ来るようになってからは？

AI：最初、心配だったんです。どういう仕事すんのかなって。だけど、やっぱり、あー私らの仕事だなって。みんな働いて、楽しみなんですね。

「あー私らの仕事だな」と述べるように、震災前まで行っていた農作業を共同で行うことが楽しみであるという。震災前後で生活が大きく変化したAIさんにとって、健康農業の場は家族への気遣いから一時的に解放され、元の地域の友人と会うことができる場である。

(3) Eさんのケース

元々農業になじみがなかった参加者のケースとして、Eさん(69歳女性)のケースを見ていきたい。Eさんは、県外の炭鉱街で生まれ、中学校卒業後は地元の商店で働き、18歳の時に結婚した。その後、サラリーマンである夫の転勤に伴い転居を繰り返す。結婚から5年ほど後に宮城県に転勤となり、亘理町近隣の市町村に42年ほど住み、震災の約1年半前に亘理町に引っ越した。理由は夫が浜育ちであり、海の近くに家を建てたかったことと、夫の前職場の関係で縁があったということでA地域に引っ越しをした。夫は、仕事の他、趣味で魚釣りや家庭菜園などをしていたが、Eさん自身は、震災前まで亘理町内で清掃のパートをしていた。農業はこの活動に参加するまでしたことがなかったという。

震災時、Eさんは亘理町内のスーパーにおり、一旦家に戻り夫と避難した。避難中にEさんは「黒い壁」となった津波を見て、足元が水で浸る中なんとか

して避難先の中学校の2階へとたどり着いた。しかし「家が流れていくの見たんだもの。中学校に避難して、お父さんと2人で流れていく家見て、『お父さん。うちだわ、あれ』って。そのとき何も考えないで、『流れてったね』で終わりだったね」と家が流されていく様子を見ていたと語る。自宅が流されてしまったEさん夫妻は、仮設住宅での生活を始める。以前のパート先は津波被害により閉館し、Eさん自身も退職することとなった。しかし、そうした震災経験もEさんは「良かったことにしよう」という。被災経験の昇華の過程にあるのは、仮設住宅での「輪」の広がりであるという。

E : 「1年半住んだだけでも良かったね」って難しいよね。この津波がなきゃって、みんな思うんだけど。でも、津波があったおかげで、すごい輪でしたよ。私の輪は。

筆者：「輪」？

E : 人とのつながりがもう見事でした。だから「良かったことにしようね」って。

筆者：避難所とか仮設住宅で、新しい知り合いというか？

E : いっぱいできたからね。

筆者：引っ越してから1年3カ月だったと思うんですけど、その頃は、ご近所付き合いは？

E : 何もなかったです。勤めてたから。1日おきの勤めだったんだけど、周りの人は隣しか。何かあればお父さんが出掛けてたから、そういうのは分からない。避難して、仮設に入って隣の方が知ってる方で。その方が出掛けるもんで「今日はどこ行くの？」っていったら、「N丁目の集まり」とか言うから、「え？」って言ったの。「そういえば、あんたもN丁目だよな」って言われて、その輪に入れてもらって。それで初めてN丁目の方が分かって。

その後は、集会所で行われるさまざまな催しに参加するようになり、仮設住宅を出た後も定期的に開かれているN丁目の集まりに参加している。健康農業への参加も、N丁目の集まりがきっかけとなった。

E : 集会所。仮設にいて、募集してたから、それで入ったんです。

筆者：募集。そのときは友達と一緒に？

E : 仮設の人たちでみんな一緒に集まって、お話聞いて。あのとき、XX（元参加者）と一緒にだったもんで。

筆者：そうなんですね。XXさんとは仮設に入ってから、仲良くなって？

E : 仮設に入ってから。N丁目の繋がりだから。

筆者：今、ここ入ってから、お友達というか、お知り合いの輪が、また広がったりとか。

E : 結構、知らない人が多かったから。入ったとき。私はN丁目のどこの人だって言われたって、全然分からないから。こういう所に入ると、どこどこの誰だよって言われて。皆さん名字じゃなくて、名前で言うんですよ。ここへ入ってXさんもN丁目だったんだと（いうのがわかって）。

EさんはN丁目の集まりや健康農業の活動に参加するようになって、初めて自分が住んでいた地域の人々と触れ合う機会が得られた。現在は、家にいることが多いため、活動について「楽しいですよ。ここへきてやることは」と語る。

4. 考察－健康農業活動に何を求めるのか

質問紙調査から明らかとなったのは、活動参加者は65歳以上の高齢者層であったものの、震災前は仕事に従事していた者の割合も高く、震災による職業引退が多く見られた点であった。震災後は、自給農業や家庭菜園を約半数の参加者が営んでいた。健康農業について、前章でとりあげた3人の参加者の参加のきっかけは「友人に誘われて(誘い合って)」という点、活動の継続は端的に「楽しいから」という点が共通して挙げられている。しかし、各々農業の場を持ち、さまざまなコミュニティ活動もあるなかで、何故この活動へ継続的に参加するのだろうか。

まず、AGさんのケースでは、自らも自家用畑をもつもののこの活動に参加す

るのは、震災前に共同作業で繋がっていた人々と再び共に働くことに意味を見出していたためであった。筆者が同じグループの人々について「知り合い」としたところを「友達っていうか仲間」としていたり、「(活動を休む時は)寂しいっていうか『悪いな』って思う」という言葉に表れているように、かつての農業とそれを取り巻く関係性と同様の捉え方をしている。筆者の「みんな来て？」という問いかけにも「みんな働いているのに」と言い直す点からも、AGさんにとって健康農業は、単なるレクリエーションではなく「働く」場という意味を持つと考えられる。こうした捉え方をする背景には、AGさんの実家と嫁ぎ先が共にB地域の農家であり、農業については家族の中で中心的な役割を担ってきたために、農業を巡る人間関係が強い点が関係すると考えられる。

AIさんのケースでは、「最初、心配だったんです。どういう仕事すんのかなって。だけどやっぱり、あー私らの仕事だなって」と震災前まで馴染みの深かった農作業であるという点が参加要因になっている。この点については、「農家の者だから、結局いいんでないかなと思って」(AGさん)、「昔やってたからやってみるか」(Oさん)等他の参加者も語っており、「農家であった」という震災前までの生活に戻るという意味が生じている。また日常生活は「家族に気を遣う」中で、昼食後に皿洗いをしたり、仕事ができるという点も活動の楽しみであると語っており、震災後の生活変化によって生じたストレスからも一時的に解放される場として位置づけられている。

Eさんのケースでは、2人のケースと異なり震災前までは農業や地域住民にはなじみがなく、震災前の生活習慣を想起させるというものではない。しかし、震災経験さえも「よかったことにしよう」と言わせてしまうコミュニティを避難生活の中で得ており、そうしたコミュニティをきっかけに馴染みのなかった農業に挑戦し、継続して参加している。Eさんにとっては、農作業そのものよりも「輪」であるという点が重要視されている。

以上のように、健康農業における農的活動の意味づけはそれまでの生活の在り方によって異なるものであったが、共通するのは、震災と避難生活の過程で失われた過去の生活を健康農業に見出しているという点である。AGさんは震災前の農家として働いていた時、AIさんにとっては、家族と同居する前、Eさんは仮設住宅での生活である。居住地、仕事、家族関係等が震災という外的要因

によって変化した中、健康農業によってこうした過去の生活を想起していた。

震災復興過程における農的活動は、「農的福祉力」の観点からすれば、被災経験の辛さや生活変化における不安を癒す効果を持ち合わせたと言えるだろう。こうした癒しの効果は、「農家であった」「農村で暮らしていた」という人生との呼応や農的活動によって構築される人間関係によって得られるものである。ただし、自らの畑を持つ者も参加者の中に多いことから、「農的福祉力」で述べられているような農業が持つ内在的な力というよりも、健康農業が共同作業であるという点に大きな意味があるだろう。ここでの共同性が、人間関係を形成したり、生活慣習を参加者同士で想起しあったりする要因になったと考えられる。

5. 結論と今後の検討課題

本研究から明らかとなったのは、被災地域における高齢者にとっての農的活動は、震災前後あるいは避難生活前後の人間関係や日常的な慣習といった生活の在り方をつなぎとめる軸として意味をもつということである。特に震災前まで農業者であった者にとっては、経営的な農業を再開することは難しくとも、農的活動に携わることによって震災前までの生活を想起し、現在の生活の不安や不満を取り除く効果が見られた。またこうした効果は、健康農業が共同作業である点も大きく関係しており、「農的福祉力」を検討する際には、農作業を行う時の共同性が重要になるのではないかとということが考えられた。福島県の実況を含め、長期化が懸念される震災復興の場面において、こうした農的活動は、経済的な意味合いは小さくとも、生活支援の1つの形として取り入れられていくことができるのではないだろうか。

ただし、冒頭で述べた「農的福祉力」を議論するにあたっての本研究の限界点は、震災復興という平時の社会とは異なる文脈である点、詳しく言及した対象者が3名に留まっており、他の重要な語りを十分に参照できなかったという点である。これらの点は、方法論上の限界でもあると考え、今後は研究手法の再考を含め検討していきたい。

最後に実践的な課題として、「復興支援活動」の継続困難の問題がある。健

康農業の活動が続けてきたロシナンテスは、平成27年度の活動を持って東北復興支援から撤退することを表明した（2015年12月、団体ホームページ）。震災から年月を経るなかで、被災者支援団体の撤退は相次いでおり、今後地域の中でどのような仕組みで被災者の生活を支えていけるのかという課題がある。本事例の場合、ロシナンテススタッフの働きかけにより、2016年4月以降は、地元の植林団体が活動を担っていくこととなった。また、2016年6月より亘理町社会福祉協議会でも同様の農業サロンを開始しており、コミュニティとしての農業の場は、地域社会の中に根付きつつある。今後も調査を継続し、動向を追っていきたい。

6. 論文作成計画と調査研究結果の活用方針

現在、亘理町の被災者の生活や支援活動の動向について継続した調査を実施中である（平成28年度日本学術振興会特別研究員奨励費）。これまでの調査結果は、第64回関東社会学会における自由報告「東日本大震災後の被災高齢者の生活変化—宮城県亘理郡亘理町『健康農業亘理いちご畑』の参加者から—」および、藤原佳典・小池高史編『何歳まで働くべきか？（ジェロントロジー・ライブラリー——高齢期の就業と健康）』（平成28年10月発刊）の一章として発表した。今後は継続中の調査結果と共に、学会誌への投稿と学位論文への内容の構成を計画している。

謝 辞

本研究を進めるにあたってご協力をいただいた、NPO法人ロシナンテスのスタッフの皆様、健康農業亘理いちご畑の参加者の皆様に厚く御礼申し上げます。本研究は公益財団法人日本農業研究所平成27年度人文・社会科学系若手研究者助成事業の助成を受けたものです。

注

- 1) 宮城県の農業経営体について「農業経営体数は3万9千経営体で、5年前に比べて

1万2千経営体（23.4%）減少した。また、5年前に比べて、沿海市区町村では5千経営体（34.1%）、内陸市区町村では7千経営体（19.2%）の減少となっている。組織経営体数は1255経営体で、5年前に比べて83経営体（7.1%）増加した。」（p.22）とある。

- 2) 池上の『『良くあること』としての福祉』とは、「そのひとにとって良い状態を達成・維持する」という点に焦点があてられるウェルビーイング（well-being）を指す。従来の「福祉」の訳語であるウェルフェア（welfare）は経済厚生とその恩恵的補給に力点が置かれていたが、ウェルビーイング（well-being）は、健康や生きがいの創出、誇りの保持など精神的側面を含むものであり、池上は、福祉分野で進むこうしたパラダイム転換を強調している。
- 3) 農的な営為の運動効果・心理的・生理的効果については、自然科学の分野においても研究が進んでいるが、池上は農が持つ健康機能だけではなく、より広義の福祉を引き出す力として捉えている。具体的にそれは、「人びとが属性や立場を超えて安心して生き生きと暮らす（よく生きる）こと」としての福祉（池上 2013: 247）である。筆者は、池上による自然科学的な範疇に留まらない福祉という概念には同意するが、社会学的アプローチによる実証的な追及を進めるべきであると考えている。
- 4) 言葉の定義に関して、本稿における農的活動とは、事例として取り扱う健康農業活動にみられるような農作業への従事を指す。一方、「農業」という語は、震災前後の生活全般に関する農的活動を指すものであり、販売農家として営まれてきたものから自給農業までを含める。
- 5) 本研究の手法は、ヒアリング調査をベースとしながらも、様々な手法を組み合わせた「広義のフィールドワーク」（佐藤 2002: 67）にあたるものである。こうした手法をとるのは、フィールドワークの持つ「全体論的な方向、つまり、生身の人間の行動、あるいは文化や社会の複雑な成り立ちに必然的に含まれる矛盾や非一貫性を、とりあえずはまずそのまま丸ごと捉えようとする」（佐藤 2002: 68）姿勢が、被災者の生活における農業の意味付けを明らかにするために求められるためである。
- 6) ライフストーリー研究は、個人のライフを聞き取るという点においては、ライフヒストリー（生活史）研究と類似性を持つ。日本の社会学におけるライフヒストリー研究の先駆けとなったのは、中野卓の『口述の生活史』（1977）である。中野は「特定の社会集団のモノグラフ的研究を通じて全体社会へ接近する方法が可能であると同様に、特定個人のモノグラフ的研究を通じて、（中略）全体社会へ接近する試み」（中野 1981）として、個人の生活史への接近から、社会現象を読み解く試みを行った。これを引き継いだのが桜井厚によるライフストーリー研究である。ライフヒストリー研究は「対象となる個人の住観的現実を社会的、文化的、歴史的脈絡の中に位置づけること」（桜井 2002）が主眼である。この場合、個人史の時系列的な整理が施され記述される聞き手の姿や発話は省略されることが多い。一方、ライフストーリー研究は、インタビューの場での語り手と聞き手の対話から生み出される物語（ストーリー）に焦点を

おき、こうした物語に表れる個人の意味世界を明らかにすることが目的である。桜井は、両者の決定的な相違を調査者の位置づけが異なるところとしているが、研究者によって、両者の区別への見解はさまざまであるのが現状である（詳しくは、亀崎 [2010] を参照）。

- 7) こうした観点からライフストーリーを用いたもので、高山真（2016）による長崎原爆被爆者に関する研究がある。この研究では、爆心地に近く、悲惨な体験を、迫力を持って語る「有名な被爆者」ではないと自ら位置づける被爆者たちの語りに迫ったものである。高山は、こうした人々の多様な生の歩み方や苦悩を描くことで、既存の被爆者像とは異なる被爆者の姿を明らかにしている。
- 8) 農林業センサス（2010年）によれば、A地域は109経営体（うち法人は1経営体）、B地域は480経営体の農業経営体が存在していたが、専業農家数は、A地域19戸（17.6%）、B地域137戸（28.5%）であった。いちご栽培に関しては、A地域は12経営体（11.0%）、B地域は221経営体（46.0%）と全経営体に対する割合からしても大きな差が見られる。
- 9) 『亘理町震災復興計画——安全・安心・元気のあるまち 亘理』、p. 34
- 10) 活動経緯に関しては2014年5月4日、ロシナンテス東北事業部部長0さんに実施したインタビューに基づく。
- 11) 園芸療法とは、「園芸作業がもつ心身の癒しと活性化の効果に着目して、保健・医療・福祉の分野で、クライアントの機能回復を促進するために園芸を用いるリハビリテーション体系の一つ」（長尾・武山 2000）とされている。ただし、その内容の実態としては、病院内で行うプランター作業から、地域と一体となった畑の耕作まであり、定義は曖昧である。

参考文献

- 江頭 説子、2007、「社会学とオーラル・ヒストリー——ライフ・ヒストリーとオーラル・ヒストリーの関係を中心に（特集 社会科学研究とオーラル・ヒストリー）」『大原社会問題研究所雑誌』（585）： 11-32.
- 冬木 勝仁、2012、「宮城県の被災地における農業と復旧・復興の現状（東日本大震災と農業・農村： どう立ち向かうか、どう支えるか）—— 3・11複合災害の再検証と復興への胎動」『農業と経済』78(4)： 65-74.
- 亀崎美沙子、2010、「ライフヒストリーとライフストーリーの相違——桜井厚の議論を手がかりに」『東京家政大学博物館紀要』（15）： 11-23.
- 池上甲一、2013、『農の福祉力——アグロ・メディコ・ポリスの挑戦』、農文協.
- 松本 誠司・高塚 泰誠、2013、「農業政策における福祉農業の位置づけ（特集 福祉農業を拓く）——（療養の場から就労の場へ）」『農業と経済』79(10)： 23-28.
- 三井さよ、2013、「足湯ボランティア『つぶやき』質的分析」、震災がつなぐ全国ネットワーク、『東日本大震災支援活動の記録』vol. 2： 20-25.

- 望月 美希、2016、「震災復興過程における生きがいとしての仕事：東日本大震災後の宮城県岩沼市玉浦地区の農業者を事例として」『地域社会学会年報』28：77-92.
- 長尾譲治、武山梅乗、2000、「園芸療法——その治療論的視点と地域論的視点」『駒沢社会学研究』32：123-148.
- 似田貝香門、2014、「災害からの復旧・復興の『経済』economy複合体——新たなモラル・エコノミーを求めて」『地域社会学会年報』(26)：135-152.
- 額田勲、2013、『孤独死——被災地で考える人間の復興』、岩波現代文庫.
- 農林水産省、2012、『2010年世界農林業センサス——宮城県』.
- 農林水産省大臣官房統計部、2015、「2015年農林業センサス結果の概要（概数値）」（2015年11月27日 公表、http://www.maff.go.jp/j/tokei/census/afc/2015/pdf/census_20151127.pdf）
- 大川弥生、2013、『「動かない」と人は病む——生活不活発病とは何か』、講談社現代新書.
- 桜井厚、2002、『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』、せりか書房.
- 桜井厚、2012、『現代社会学ライブラリー7 ライフストーリー論』、弘文堂.
- 桜井厚・石川良子編、2015『ライフストーリー研究により何ができるか』、新曜社.
- 佐藤郁哉、2002、『フィールドワークの技法』、新曜社.
- 高山真、2016、『<被爆者>になる——変容する<わたし>のライフストーリー・インタビュー』、せりか書房.
- 亘理町、2012、『亘理町震災復興計画——安全・安心・元気のあるまち亘理』.